



AI時代でも 土台は言語能力・読解力

(公社)全国学校図書館協議会では、2024年度文部科学省委託事業として、校長向けに、学校図書館の機能や基本的な概念を伝え学校経営に学校図書館を位置づけるためのパンフレットを、教職員向けに、学校図書館の基礎知識と学校図書館活用のヒントとなるパンフレットを作成し公開していますが、教職員向けパンフレットの中に下記の記述がありました。

AIの急速な発展の中で、人間の強みを発揮するための基盤が言語能力であり、読解力です。年齢に応じて語彙を増やし、想像力、思考力、表現力等を伸ばしていくことが重要です。情報を活用するにも言語能力が基盤となります。今、言語能力の育成は学校教育における最大の課題です。「子どもの読書活動の推進に関する法律」(2001年)第二条(基本理念)には、「子ども(おおむね十八歳以下の者をいう。)の読書活動は、子どもが、言葉を学び、感性を磨き、表現力を高め、創造力を豊かなものにし、人生をより深く生きる力を身に付けていく上で欠くことのできないものである」とあります。

子どもたちにとって、読書は趣味ではありません。生きる力です。生きる力を身につけていくために全教科・全教育活動を通じて、言語能力育成に取り組む必要があります。そのために、学校図書館を核にしながら、一人ひとりの教員が丁寧に読書指導に取り組ましましょう。

読書をするると…

- 「世界が広がる」「さまざまな体験が本の中でできる」「情報が得られる」
- 「思考力が深くなる」「理解力読解力が高くなる」「感情のコントロールも学ぶ」
- 「語彙力が増え、伝える力、対話力が豊かになる 強くなる」
- 「心に残った文章の書きぬき、要約など書くことと結びつけるともっと力は大きくなる」
- 「想像力・判断力が育成される」

これらは、学校教育における読書活動の意義ですが、「子どもたちにとって、読書は趣味ではありません。生きる力です。」という表記は印象的です。それぞれの立場で、なぜ、子ども達に、読書活動を推進するのかを改めて考えたいものです。

<(公社)全国学校図書館協議会作成パンフレット>

<https://www.j-sla.or.jp/material/achievement/kensyuu-pamp-r7.htm>

「校長のリーダーシップがカギ！ 学校図書館活用で学びの充実を」〔校長向け〕
「豊かな授業づくりに学校図書館を！」〔教職員向け〕

図書館となかよしになろう

5月も下旬を迎え、学校では、4月に入学や進級した子ども達が、新しい環境や学習に、少しずつ慣れ始めた頃となりました。そのような中、それぞれの学校図書館では、学校司書や学級担任を中心に、子ども達に学校図書館オリエンテーションを行い、気持ちも新たに図書館を開館しているところです。

この年度初めのオリエンテーションでは、子ども達が気持ちよく、そして、楽しく学校図書館を利用することができるための「正しい学校図書館利用の方法や約束」を確認し、「読み聞かせ」や「ブックトーク」等を通して、子ども達が「早く本を借りたい。」「図書館って楽しそう。」といった「本との出会いへの期待」を高めることができるようにしています。

さらに各教室では、国語科の時間に、子ども達が、学校図書館や公共図書館を発達段階に応じた活用ができるように学習を行っています。

<福岡市小学校の各学年の図書館に関する国語科学習内容>

学年 題材名	内 容
1年「こんな もの みつけたよ」 1年「としょかんとなかよし」	図書館のマナー 表紙と題名を手がかりに読みたい本を見つける 読書記録
2年「図書館たんけん」	本の分け方、本のならべかた 読書記録
3年「図書館たんていだん」	本の分類について 読書記録
4年「図書館の達人になろう」	本の探し方やラベルの役割 読書記録
5年「図書館を使いこなそう」	日本十進分類法、著作権 読書記録
6年「公共図書館を活用しよう」	公共図書館、地域の施設の活用 読書記録

低学年では、学校にはみんなで使う図書館があることや使い方。中学年では、本を自分で探したり、資料を使ったりして、自分で調べる楽しさ。高学年では、日本十進分類法についても学び、知りたい情報は学校図書館以外でも知る施設がたくさんあることを知り、子ども自らの学びの幅を広げることができるように学習します。

子ども達が学校で、本の楽しさを知り、本の探し方を身に着けることにより、家庭や公民館にある文庫、近くの公共図書館を使って、自らの手で、読書活動を進めることができるようになって欲しいものです。

5月も半ばを過ぎますと、例年、沖縄では「梅雨入り」。福岡地方の梅雨入りも、6月中旬となっています。雨の多くなるこの時期、学校では、子ども達が、学校図書館や教室で、本に出会い、親しむのに良いチャンスとなるのではないのでしょうか。また、ご家庭でも、テレビやゲームだけではなく、静かに雨音を聞きながら、家族全員で、ゆっくりと本を読む時間を楽しんでみては、いかがでしょうか。



6月のことと人

6月10日 「時の記念日」

東京天文台（現：国立天文台）と財団法人・生活改善同盟会が1920年（大正9年）に制定しました。「時間をきちんと守り、欧米並みに生活の改善・合理化を図ろう」と呼びかけ、時間の大切さを尊重する意識を広めるために設けられたそうです。

6月21日 「夏至」

「二十四節気」の一つ。「夏至」の日付は、年によって異なる。2025年は、6月21日（土）である。北半球では一年のうちで昼（日の出から日没まで）が最も長く、夜が最も短くなる。昼の時間は約14時間30分、夜の時間は約9時間30分となる。

ポール・スチュワート（1955.6.4～ ）

イギリス生まれ。児童文学作家。1988年より作家活動を始めました。イラストレータークリス・リデルと共作した「崖（がい）の国物語」は有名です。

この本は、作家の物語を元にイラストを描くのではなく、2人で議論しながら1つのものを作り上げていったそうです。そのため、作家とイラストレーターが対等に表記されています。

新田 次郎（1912.6.6～1980.2.15）

長野県生まれ。小説家、気象学者。気象庁職員として、富士山気象レーダー建設などに携わったわらに執筆活動をおこないました。

山を舞台に自然対人間をテーマとする、山岳小説の分野を開拓し『強力伝』（1955年）で直木賞受賞。代表作として『孤高の人』（1969年）、『八甲田山死の彷徨』（1971年）などがあります。

有川 ひろ（1972.6.9～ ）

高知県生まれ。小説家。2019年に、ペンネームの表記を有川 浩から有川 ひろ（読みはそのまま）へ改めています。SFと軍事的要素の強いライトノベルで人気を博し、その後、一般文芸作品も手がけ多くの読者を獲得しました。代表作の「図書館戦争」「三匹のおっさん」シリーズや「阪急電車」、「空飛ぶ広報室」などは、映像化もされ有名です。

土家 由岐雄（1904.6.10～1999.7.3）

東京都生まれ。児童文学作家。少年時代に図書館に通って巖谷小波の作品を愛読したことがきっかけとなり、児童文学作家を志望するようになりました。戦後、幼年童話の分野でも活動を始め、小学館児童文化賞を受賞した『三びきのこねこ』や、『かわいそうなぞう』で注目を集めるようになり、1975年には児童文化功労者として、日本児童文芸家協会から表彰された。

図書館員のひみつの本棚 第229回

今月は、オランダ発の冒険物語を紹介します。

『ふたごの兄弟の物語』 上下 トンケ・ドラフト／作, 西村 由美／訳 岩波書店 2008.12

<お勧め年齢>

乳幼児☆☆☆ 小低学年☆☆☆ 小中学年★☆☆ 小高学年★★★★ 中学生★★★★

高校★★☆ 一般★★☆

(★が多い年齢の子どもにお勧めです。)

<本の紹介>

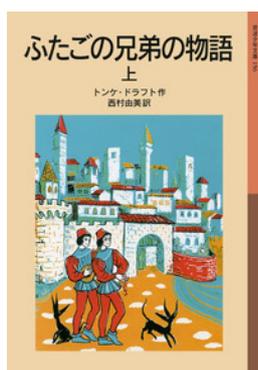
もうすぐ子どもが産まれる靴屋のところに、2ひきの子犬、2ひきの子ネコ、2羽のハトがやってきました。そして産まれたのは、ふたごの男の子！

それぞれに犬を従え、ハトを肩に乗せ、ネコを腕に抱いて歩く姿は本当にそっくりで、仲の良い2人はいつも一緒にいました。でも、15歳の時にお父さんが亡くなり、2人はそれぞれの道を歩き始めます。時に別々に、時に一緒に、様々な冒険をしていく2人は、いったいどんな道を見つけていくのでしょうか？

<子どもに手渡す時のポイント>

なぞなぞを出す騎士が出てきたり、伝説の指輪が出てきたり、昔話のような雰囲気のある冒険物語です。上下巻の長い物語ですが、全部で12章に分かれており、それぞれの章で小さな物語が完結します。1章ずつ読んでも満足できる内容なので、少しずつ読み進めることも可能です。

ワクワクしながら2人と一緒に冒険を楽しんでください



このコーナーで紹介した本はお近くの図書館や書店に置いてあります。ぜひ手にとってみてください。